

武田安藝守信満もつるの郡へ馳出、二年に及て合戦すと、いへども多勢に無勢不叶、終に打負信

満は甲州都留郡木賊山にて自害してうせぬ、法名明庵道光、于時應永廿四年二月六日事也。申

略 甲斐國は逸見に給はり打入けり、然といへども京都公方より御引渡はなし、鎌倉殿よりの御

意計也、此時信満入道朋庵の二男右馬助信長と云人有、一人國へ立歸り、郡内の加藤入道梵玄を

相與し、西郡へ押寄逸見と合戦數年也、此加藤と申は頼朝の御時武田兄弟に安田遠江守義定と

申て遠江當國を給し人あり、梶原が讒言して、安田謀反の由、頼朝へ申止める間、頼朝に憾、則梶

原と加藤の元祖加藤景廉と二人に打手を被下、義定は法光寺にて自害被成、然ば義定の跡を加

藤に被下、甲斐國に加藤景坤在所あり、是は彼加藤入道妙法房の居所を後にして所名と也。申

逸見、武田兩家の合戦、應永廿四年より初る、終に逸見は打負或は討死或は自害に至り、殘る人

火鎌倉へ歎申間、持氏大にむかひ於まひ、應永卅三年、一色刑部大輔持家爲大將、一千餘騎發向

す、しかれば甲州は要害能國にて人の心も不敵なれば、鎌倉勢を事ともせず、度々の戦に持氏方

打負しかば、持氏御旗をむけらるゝ、同六月廿六日、武州横山口より發向有て、武田を責らるゝ、信

長もさる橋へ馳むかひ、責戦といへども、同八月一日、武州の七黨秩父口より亂入しかば、八月廿

五日不叶信長甲をぬき降参しける、御免被成鎌倉へ召れける、加藤入道は無雙の大力にて、鐵の

棒を杖につきて參りける、見る人驚目ける、甲州をば京都へ御申上られ、逸見に可被下候よし、海

老名三河守を以て再三御訴訟有しかども、其此の公方義持公より、高野に在し信濃守信元を召

出して、是に給るべきよしの止意にて、信元國に打入れる鎌倉殿も力に不及、信元に御教書を給

けり、逸見は如元西郡名字の地計を知行す、信元は武田陸奥守に成鎌倉へ出仕申、法名は淨國院、

信元に一子有彦次郎と號、父より先に逝去す、信元にも甥なり、武勇もよし、信長に家を禪ひたく

おもひけれども、一度禪秀一味の科有て、京より御免なし、然間信長の一男伊豆千世丸とて、土屋